

都市システム学系創設

80

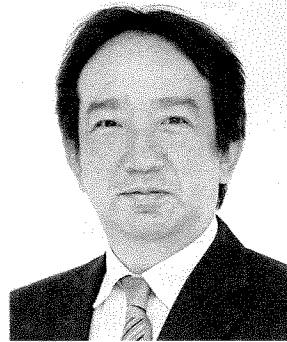
周年記念誌

2018年10月

立命館大学工学部都市システム学系







## ご挨拶

都市システム系学系長  
環境都市工学科教授

神子 直之

立命館大学理工学部都市システム系二学科は、本年2018年4月に創立80年を迎えました。1993年11月に発行された立命館大学土木工学科創設55年誌によりますと、1938年に立命館高等工科学校が設立された際に土木科と建築科が設置されたのが最初の姿で、戦後には新制大学で理工学部が誕生して土木工学科となり、その後の変遷については本誌にある通りです。

80年と言えば人の一生に匹敵する長さであり、たかだか着任後十数年の私には、途方も無く長い期間であると思われます。戦前からですから、時代は変わりそれに伴って人々の経済状態も、生活も、学生の気質もそれぞれ大きく変わって来ました。その中で、社会に巣立つ直前の人間に土木を中心とした学問をぶれずに長年教えてきた、その組織としての営みには頭が下がる思いです。

現在の都市システム系(環境都市系から名称変更)は、本年4月に都市システム工学科と環境システム工学科が合併して出来た環境都市工学科と建築都市デザイン学科の二学科で構成されています。学生数は学年毎に環境都市工学科が150名程度、建築都市デザイン学科が70名程度で、毎年200名を超える卒業生を世に送り出しています。大学院進学者も波はありますが一定数存在し、高等教育機関としての責務をしっかりと果たしています。我々教員の耳に届く卒業生の評判は非常に良く、それに加えて活気ある求人状況で、本学系の学生の就職はとても好調と言えます。希望する職場で自身の能力を存分に発揮できるような環境に身を置く準備をしっかりとすること、それが大学における最終的な教育目標であり、それが幾分かではありますが達成できているのだなと胸をなで下ろすことができる現況です。

ただ、今これが出来ているのは、学系の脈々と続く歴史を築き上げてきた諸先輩方による努力の賜であることは言うまでもありません。言い古された言葉ですが、温故知新、故き(ふるき)を温ねて(たずねて)新しきを知る。本誌には、我々の今後を考えるのに有用な、学系の歩みや関わられた方々からの様々な寄稿が、また、現在の本学教員による今後の展望が書かれています。過去をあらためて見据えた上で今後の学系の目指す先を占う羅針盤として、本誌が活用されることを望みます。

# 目次

## ご挨拶

都市システム系学系長 神子 直之

## 祝 辞

立命館理事長	森島 朋三	1
立命館総長	吉田美喜夫	2
理工学部長	深川 良一	3
建設会会長	桑山 忠	4

## I. 都市システム学系のこれまでの歩みと今後の展望

キャンパスの写真と教員および研究室の変遷 8

### 1. 80年を振り返るー BKC 新展開以降の歩みを中心にー 18

BKC 新展開以前の土木工学科の歩み 早川 清 19

BKC 新展開以降の土木工学科の歩み 野阪克義・深川良一・小林紘士 26

環境システム工学科の歩み 山田 淳・中島 淳 31

建築都市デザイン学科の歩み 平尾和洋・山崎正史 36

土木工学科・都市システム工学科における JABEE の取り組み  
小川圭一・伊津野和行 41

環境システム工学科における JABEE の取り組み 樋口能士 43

建築都市デザイン学科におけるスタジオ・デザイン・プログラム (SDP) の取り組み  
武田史朗 45

文化遺産防災の取り組み 大窪健之 48

建設会 35 年 (昭和 23 年～昭和 58 年) の歩み 早川 清 51

### 2. 将来の発展に向けて 54

国際化 橋本征二 55

防災に関わる教育・研究の今後の展望 里深好文・吉富信太 57

環境分野における教育・研究の未来に関する一考察 佐藤圭輔・市木敦之 59

今後の展望 建築都市デザイン学科 宗本晋作・近本智行 62

ICT 利活用の動向と展望 小林泰三・山田悟史 65

## II. 都市システム学系創設 80 周年記念誌に寄せて 72

### 1. 名誉教授、現教員、旧教員からの寄稿 74

大同 淳之 (S30) 75 村橋 正武 75 尼崎 省二 (S44) 76

岡本 享久 77 塚口 博司 78

### 2. 卒業生からの寄稿 80

川嶋 智孝 (S36) 81 平野 暉雄 (S43) 82 岡野 益巳 (S47) 83

大野 和之 (S50) 84 大森 秀高 (S50) 85 山崎 糸治 (S50) 86

片桐 泰光 (S52) 87 野崎 勝己 (S52) 88 大西 功 (S57) 89

長谷川健二 (S58) 90 市田 雅巳 (S60) 90 今井 平佳 (S61) 91

寿楽 和也 (H1) 92 小菅 真司 (H2) 93 安東 武智 (H6) 93

森 泰樹 (H10) 94 田中 周平 (H10) 95 田畑 洋輔 (H10) 95

森田 真子 (H11) 96 見島 伊織 (H12) 97 里見 知昭 (H17) 97

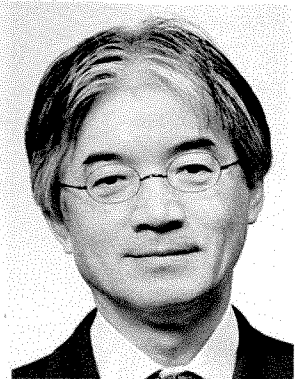
余田 尚紀 (H20) 98 米谷 直晃 (H21) 99 檀上 徹 (H21) 100

赤澤 史顕 (H22) 100 平岡 伸隆 (H22) 101 伊藤 新 (H25) 102

吉岡 慶祐 (H25) 103 近藤 真奈 (H27) 104 高柳 達 (H27) 104

## 都市システム学系の今後の さらなる発展を期待する

理工学部長  
深川 良一



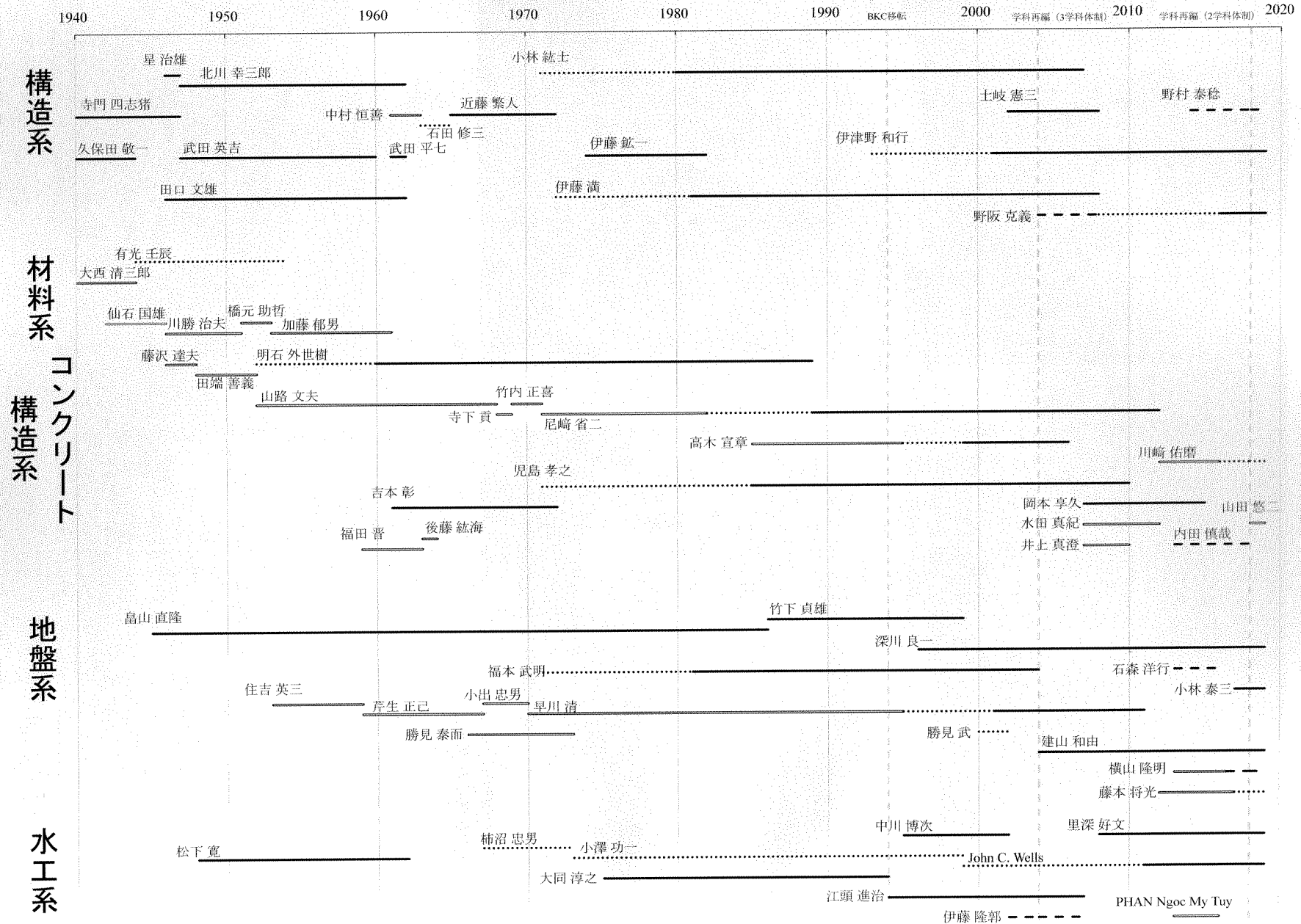
この度は都市システム学系創設80周年誠におめでとうございます。都市システム学系は、1938年に開設された立命館高等工科学校の土木科として発足しました。第2次世界大戦後の1949年には、立命館大学理工学部土木工学科および短期大学工学科土木工学専攻の設置が認可され、そのときの土木工学科学生定員は280名でした。この学生定員から、戦後の国土の復興を担って欲しいという社会の大きな期待を感じることができます。その後、1952年には短期大学の廃止、1963年には理工学研究科土木工学専攻の設置(学生定員5名)、1979年には博士課程の設置、1990年には建設コースと計画コースの設置と続きます。この間、高度経済成長を支える人材を輩出していきましたが、同時に公害問題に象徴される社会の負の問題に注目が集まり、社会の必要とする人材も益々多様なものになっていきました。

衣笠キャンパスのみで社会の多様な要請に応えることは難しくなったため、1994年に新たに滋賀県草津市に新キャンパスを開設することになりました。新キャンパスの中心となったのは理工学部でしたが、そのびわこ草津キャンパス(BKC)移転を機に土木工学科と環境システム工学科の2学科体制に移行しました。2004年にはさらに都市システム工学科、環境システム工学科、建築都市デザイン学科の3学科体制になり、また2018年には理工学部の学科再編の一環として都市システム工学科と環境システム

工学科が合体し、環境都市工学科として活動を開始しました。BKC移転後既に四半世紀が過ぎていますが、学系としてはほぼ順調に発展してきたように思います。3学科の学生定員は1949年の時点の土木工学科の学生定員とほぼ同じですが、内容的には多様になっていまして、社会状況の変化を感じることができます。

さて、都市システム学系の将来について触れたいと思います。理工学部における都市システム学系の位置、役割は若干ユニークなものだと思っています。数物系、電気電子系、機械系では論理的であることが重視され、研究結果の一般性、国際的先端性が求められます。それに対して、都市システム学系ではしばしば安心、快適、美などの個人的感覚が重視され、研究結果についても社会的貢献などのローカル性が追求されます。都市システム学系はより社会との繋がりの強い学系であり、それだけに「世のため人のため」という言葉が似合います。したがって、広い視野で学部教育、研究をリードすることが期待されています。つまり、学部の教育・研究に目的や価値を与える役割が期待されていると思うのです。学系のみならず学部としても重要なキーワードとして、環境、防災、国際化、SDGs等がありますが、これらと関係するようなプロジェクト研究のリーダーを輩出することが学系には求められていると思います。そういう意味で、今後の都市システム学系の発展を心から期待しております。

# 教員および研究室の変遷

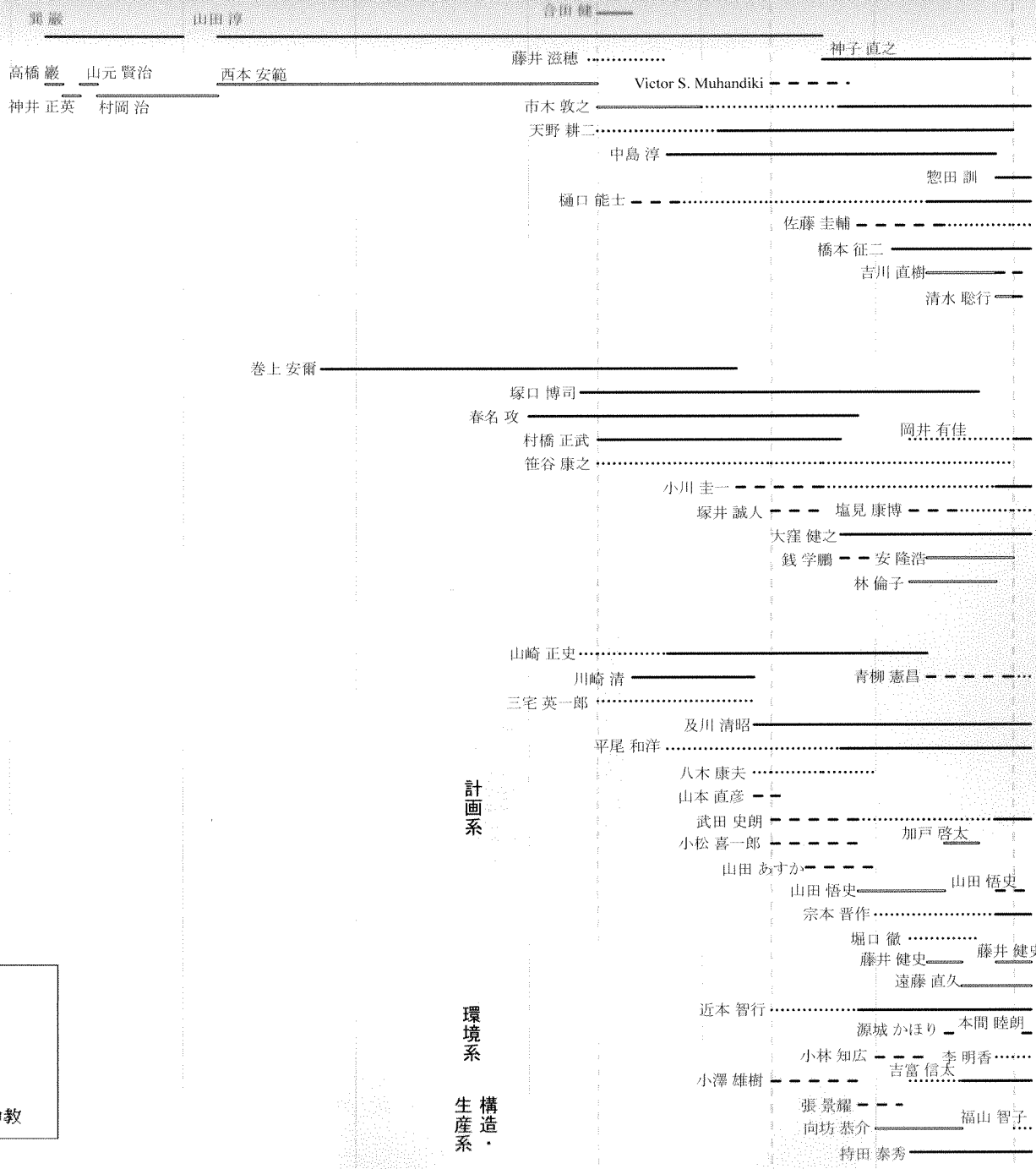


環境系

計画系

建築系

—— 教授  
 ..... 助教授・准教授  
 - - 講師  
 —— 助教・助手・特任助教



計画系

環境系

生産系